

吉川宏志歌集

『叡電のほとり』

(ふらんす堂)

二〇二三年の毎日を歌とエッセイで綴る第十歌集。京都に暮らす作者の細やかな眼差しが魅力的な一冊。

夕立の後の湿りにひぐらしのこころ持たざる声降りしきる

「ひぐらしのこころ持たざる声」という描写により、虫の声に季節の移ろいを感じ心を動かされる人間という存在と、ひぐらしとの対比が際立つ。

家族を詠んだ歌にも作者の静かなあたたかさが見える。

ゆるゆると歩める妻をふりかえる後ろにもまた桜がならぶ

もう起きていくたび母に言われしか畳の古いし部屋に目覚めつ

一首目、「後ろにもまた桜がならぶ」には、夫婦で歩いてきたこれまでの日々を重ねているのだろう。母への思いが詠まれた二首目では、「畳の古いし」という擬人化に実家や自身の青春時代への愛着が表れていると言えよう。

五十年後のあなたへ 夏は四十五度ですか魚は食べていますか

社会詠にも注目したい。ここでは五十年後への手紙という形式をとり、ALPS処理水の海洋放出に対する人間や世論の脆さに問いを投げかける。歌集全体を通して、作者の穏やかながら鋭い眼差しと精緻な描写が光る。(谷川 恵)

川野芽生歌集

『星の嵌め殺し』

(河出書房新社)

ばらいろのマカロンによるこぼときも昼月のごとそこにゐる鬱

身体を魂の喩^ウと思ふとき新月のごと冷ゆる指先

身体と天体との間に親和性を多く見出し、そこが大きな魅力である。可愛らしいフォルムのマカロンに心躍る時、ふいにそばにある鬱の存在を知覚する。青白い昼月が、喜びと鬱の表裏の危うさを浮かび上がらせる。二首目は、実体であるはずの身体を喩と捉える新鮮さや、見えないう新月に喩えることが独特である。指先から消えていくような感覚があるのだろうか。

涙代りのビジュを裾に縫ひ止めて、おそれない。どんなひかりも海も

春昼よ完璧なレースのなかにきみと編み込まれてしまひたい

ビジュとはフランス語で宝石のこと。装飾品の歌も多い。完璧なレースに取り込まれることを望み、春昼の心地よさに自我を消失させたい想いが読める。

歌集全体を見渡すと、精選され、適切な情報とイメージを併せ持つ言葉が、まるで繊細な刺繍を施されたレースのように編み込まれている。歌人で小説家で、文学研究者でもある作者の、言葉へのこだわりと信頼が見えてくる歌集である。(椎名恵理)